



Title	人間関係観の発達的变化と生き方態度との関連
Author(s)	高井, 範子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2008, 34, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6388
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人間関係観の発達的变化と生き方態度との関連

— 青年期から老年期を対象として —

高 井 範 子

目 次

1. 問題と目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察

人間関係観の発達的变化と生き方態度との関連

高 井 範 子

1. 問題と目的

中年期を肯定的に捉える見方もあれば、否定的に捉える見方もある。臨床心理の事例研究を初めとして、中年期は対象喪失という心理的危機によってアイデンティティが脅かされ (Shainess, 1977)、アイデンティティの危機の時期であるとする研究も多い (e.g. Rosenberg & Farrell, 1976)。絶え間ない自己変容を迫られ、精神的にも身体的にも危機に直面する不安定な時期でもある (Levinson, 1978; Gould, 1978)。逆に、中年期は加齢に伴い、成熟した自我の防衛スタイルを用いることによって成熟した適応様式を示すことも報告されている (Vaillant, 1977)。また、中年期の女性の場合、空の巣症候群 (夫は仕事で不在がち、子どもは進学・就職などによって巣立っていく結果生じる空虚感、抑うつ感など) と呼ばれる心身症状が生じてくることも指摘されている。しかし、子どもが巣立っていった後の「空の巣」の現在を非常に幸福だと感じている中年期女性の調査事例も報告されている (Lowenthal & Chiriboga, 1972)。中年期はさまざまな意味において人生の転換期とも言え、両面的側面をもつ時期である。

青年期 (大学生) から老年期に至る人びとを対象に、Frankl (1952, 1955, 1969) の実存分析理論に基づいて作成した生き方態度を測定する尺度 (自律性・主体的側面、自己の存在価値、自己課題性、意味志向性といった領域で構成される) を用いて調査した結果、男女共に加齢に伴い、ポジティブな生き方態度が強まっていく傾向が見出されている (高井, 1994, 1999d)。特に、特徴的なことは、女性の 40 代から 50 代にかけての 4 領域すべてにおける有意な得点上昇である。女性は、対他次元の生き方態度 (対人関係性尺度) においても、30 代までは比較的男性の方が強い傾向にあった“脱”閉鎖性やありのままの自己、“脱”他者依拠領域において、30 代から 40 代にかけて、これらの生き方態度を強めていく (高井, 1999e)。特に、30 代から 60 代にかけて、他者の目を懸念する姿勢から脱却し、傷つきを恐れず、ありのままの自己を生きる姿勢を有意に強めている。また、他者に対する世話への志向性や他者理解、ありのままの他者の受容といった他者受容領域の姿勢は、男女共に加齢に伴って強くなっていくが、女性においてその傾向が強く、30 代以降、すべての年齢段階において性差がみられている (高井, 1999e)。また、中年期の充実感の要因として、男性は「達成感」が、女性は「家族」や「対人関係」が第 1 位の要因として挙げられていた (高井, 2002a)。このように生き方態度領域において、

中年期以降に男女の相違が明確になってくることが示されている。

アイデンティティ形成や道徳性の発達に関する研究において、Gilligan (1977,1982) は、道徳的判断を下す場合、男性は、権利や規則に焦点を当てるが、女性は、責任と思いやりに焦点を当てるのだという。また、権利の倫理によって正当化される「分離」と、配慮の倫理(思いやりや心くばり)によって支持される「愛着」という概念を用い、男性は、アイデンティティを分離において定義するが、女性は、アイデンティティを人間関係において定義し、責任と配慮を基準に評価するとしている。このような道徳性発達における男女の相違についての Gilligan の研究は、他者をケアし責任をもつという、他者との関係性が、自律や達成と同様に発達にとって価値があることを認識させた(岡本,2002)。男性との比較をとおした、上記の他者受容領域における女性の発達の特徴や充実感の要因に関する結果は、Gilligan の研究における他者との関係性に関連する男女の相違に関する知見を裏付けるものであろう。

人間関係によって、人は支えられ、自信を得ることができたり、生きる意欲が湧き起こることもある(高井, 2001c)。しかし、他者との関係性は肯定的側面ばかりではない。人間関係によって人は傷つき、自信を失ったり、人間関係をうまく築けないことによるストレスが心身を蝕むこともある。人間関係もまた両価的側面をもつものであるが、人が生きる年齢段階によっても人間関係に対する捉え方は異なってくるであろうと思われる。人間関係を煩わしいと感じ、必要最小限の人間関係に留める人もいれば、より多くの人とのつながりを積極的に求める人もいるであろう。自己や人生に関するテーマ(ex.自己の存在価値、自分に対する自信、ありのままの自己受容など)についての自由記述分析において、人との関わりが契機となった意欲的な生き方態度への変容過程の一端が示されている(高井, 1998a,b,c,1999c,2000a,b,2001a)。これらのことから、ポジティブな生き方態度への変容要因の一つに他者との関係性が影響を及ぼしていることが示唆された。中年期はアイデンティティの再体制化の時期とも言われるが、生き方態度において人生の転換期となる重要なステージである(高井, 2000e)。すべての人がポジティブな生き方態度へ変容するわけではないであろうが、加齢に伴い、肯定的・否定的経験を積むことによって、そこから何かを学び取りながら生きて行く人間存在である。中年期以降の男女の相違が見出された生き方態度領域において、ポジティブな生き方態度への変容の背景要因を探るべく、本研究においては、人間関係の捉え方に着目したい。

人は、他者との関係性において生きる存在と言えるが、人が、さまざまな人間関係を自己との関連でどのように捉えているのか、そして、それらの捉え方の相違によって生き方態度がどのように異なってくるのか、年齢段階や男女によって差がみられるのか否かを探ることは、生き方態度研究にとって重要な視点の一つであると思われる。そこで、本研究において、人間関係の捉え方に関する尺度を作成し、年齢段階別の変化や男女差、生き方態度との関連を検討することを目的とする。

2. 方法

1. 人間関係観尺度の作成

自己の存在価値や自分に対する自信感、ありのままの自己受容などのテーマに関する自由記述（高井, 1998a,b,c,1999c,2000a,b,2001a）において、人間関係の捉え方に言及されていた記述から項目を収集して「人間関係観尺度」を作成した。尺度は9項目であり、「1. 全く当てはまらない」から「5. よく当てはまる」の5段階評定である。

2. 調査対象者

調査対象者は、大学生男女（4年制の国公立大学）、および20歳以上の成人男女（大学生を除く）である。対象者の居住地域は関西地域が多いが、出来る限り広範囲の地域から、また対象者の職業も、より広範囲層からの抽出となるよう心掛けた。上記の点を踏まえ、大阪府、兵庫県、京都府の関西地域を初め、北海道、長野県、栃木県、東京都、石川県、愛知県、岡山県、広島県、四国地方は徳島県、愛媛県、九州地方は宮崎県などに質問紙の配布回収を行った。調査対象者の職業は、会社員、公務員、専門職、その他の職業（農業、自営業、アルバイト）、専業主婦（パート就労有り群・無し群）、および無職である。有効回答による対象者総数は男性683名、女性1058名の計1741名であった。年齢段階別の内訳は大学生：231名（M127,F104）平均年齢20.80歳、大学生を除いた20代：186名（M63,F123）平均年齢25.90歳、30代：306名（M103,F203）平均年齢34.42歳、40代：273名（M88,F185）平均年齢44.35歳、50代：307名（M91,F216）平均年齢54.27歳、60代：338名（M155,F183）平均年齢63.82歳、70代以上：100名（M56,F44）平均年齢73.72歳である。

調査時期は、2003年3月～9月である。

3. 調査実施の手続き

質問紙配布は、筆者が直接出向いて配布・回収を行ったものや郵送による配布・回収のほか、企業等、各組織内での配布・回収は、組織内へ外部の人間が入ることは難しいため、組織に属する知人に依頼し、留置法により行った。質問紙にはすべてプライバシー保護のための封筒を付けて配布し、糊付けして回収することとした。また、人びとの生き方態度を発達的に探る本研究においては、青年期から老年期までの幅広い年齢層を調査対象としており、高齢社会となった日本において老年期をいかに生きるかという問題も重要なテーマとなる。そこで、人生を前向きに、積極的に生きる老年期の人びとの生き方意識を検討することも目的の一つであるため、老年期に関しては、近畿圏の高齢者大学に質問紙の配布・回収を依頼し協力を得た（有効回答 275 部）。

3. 結果

1. 「人間関係観尺度」の因子構造

人間関係観尺度の9項目について最尤法による因子分析（Promax 回転）を行った（Table 1）。その結果、統一的解釈が可能な3因子解を妥当とした。3因子による累積寄与率は50.49%であった。

Table 1 「人間関係観尺度」の因子パターン行列

項 目 内 容	F ₁	F ₂	F ₃
6. 家族あるいは仕事以外の人間関係は私にとって重要ではない	.812	.076	-.022
4. 私にとって人間関係から得るものは何もない	.652	-.005	-.093
8. 人との心のつながりは求めている	.579	-.148	-.025
2. 人とのつき合いを通して自分というものがわかってきた	.080	.654	.031
9. 積極的にいろいろな人とのかかわりをもっている	.047	.633	.147
7. さまざまな考え方もつ人々との出会いが自己成長につながっていると思う	-.309	.494	-.114
5. 自分とは異なる考え方や個性をもった多くの人と出会うことは楽しいと感じている	-.212	.456	-.050
3. 充実感を感じることのできる、人とのかかわりの場をもっている	.061	.085	.876
1. 心から楽しいと思える時間を共有できる相手が家族以外にいる	-.214	-.073	.589
因子間相関行列			
	F ₁	F ₂	
	F ₂	-.677	
	F ₃	-.570	.613

第1因子は、“家族あるいは仕事以外の人間関係は私にとって重要ではない。私にとって人間関係から得るものは何もない。人との心のつながりは求めている”などの項目に因子負荷量が高かったので「人間関係軽視」因子と命名した。また、第2因子は、“人とのつき合いを通して自分というものがわかってきた。積極的にいろいろな人とのかかわりをもっている。自分とは異なる考え方や個性をもった多くの人と出会うことは楽しいと感じている”といった項目に因子負荷量が高かったので「自己成長的人間関係観」因子、第3因子は、“充実感を感じることのできる、人とのかかわりの場をもっている。心から楽しいと思える時間を共有できる相手が家族以外にいる”といった項目に因子負荷量が高かったので、「充実感共有他者」因子と命名した。得点化は1点から5点を与えた。

「人間関係観尺度」の信頼性を Cronbach の α 係数によって求めたところ、第1下位尺度は .77、第2下位尺度は .72、第3下位尺度は .74 であり、各下位尺度の内的一貫性は保たれていると言えよう。

2. 「人間関係観」の発達的变化

「人間関係観尺度」に関して、大学生から70代以上の7つの年齢群による年齢段階別の差および性差を検討した（Table 2, Fig. 1）。「人間関係観尺度」の3つの下位尺度得点について年齢と性を2要因とする分散分析を行った結果、3下位尺度と

もに交互作用が有意であった（第1下位尺度： $F_{(6,1727)}=2.50, p<.05$ ；第2下位尺度： $F_{(6,1727)}=2.19, p<.05$ ；第3下位尺度： $F_{(6,1727)}=2.67, p<.05$ ）。交互作用が有意であった3つの下位尺度についてそれぞれ水準ごとに単純主効果の検定を行った。

Table2 年齢段階別における「人間関係観尺度」の尺度得点平均値 (SD)

			大学生	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	年齢差	性差	交互作用
第1下位尺度 「人間関係軽視」	男性	M	4.73	4.59	4.72	5.39	5.57	5.46	5.8			
		SD	2.16	1.86	1.74	1.99	2.31	2.00	1.95			
	女性	M	4.46	4.51	4.68	4.78	4.55	4.56	5.11	4.48**	24.32**	2.50*
		SD	2.01	1.96	1.82	2.03	1.83	1.61	2.37			
	性差					*	***	***				
第2下位尺度 「自己成長の人間関係観」	男性	M	15.51	15.62	15.25	14.79	15.32	15.51	15.46			
		SD	2.82	3.16	2.76	2.89	2.96	2.30	2.25			
	女性	M	16.13	15.81	15.43	15.78	16.27	17.06	16.25	4.53***	27.52***	2.19*
		SD	2.83	2.98	2.54	2.70	2.62	2.25	2.92			
	性差					**	**	***				
第3下位尺度 「充実感共有他者」	男性	M	7.98	7.97	7.43	6.78	7.43	7.75	7.54			
		SD	1.95	1.59	1.92	1.96	1.77	1.74	1.51			
	女性	M	8.38	8.01	7.8	7.94	8.37	8.57	8.45	7.23***	49.93***	2.67*
		SD	1.73	1.89	1.86	1.73	1.44	1.58	1.81			
	性差					***	***	***	**			

(*** $p<.001$, ** $P<.01$, * $p<.05$)

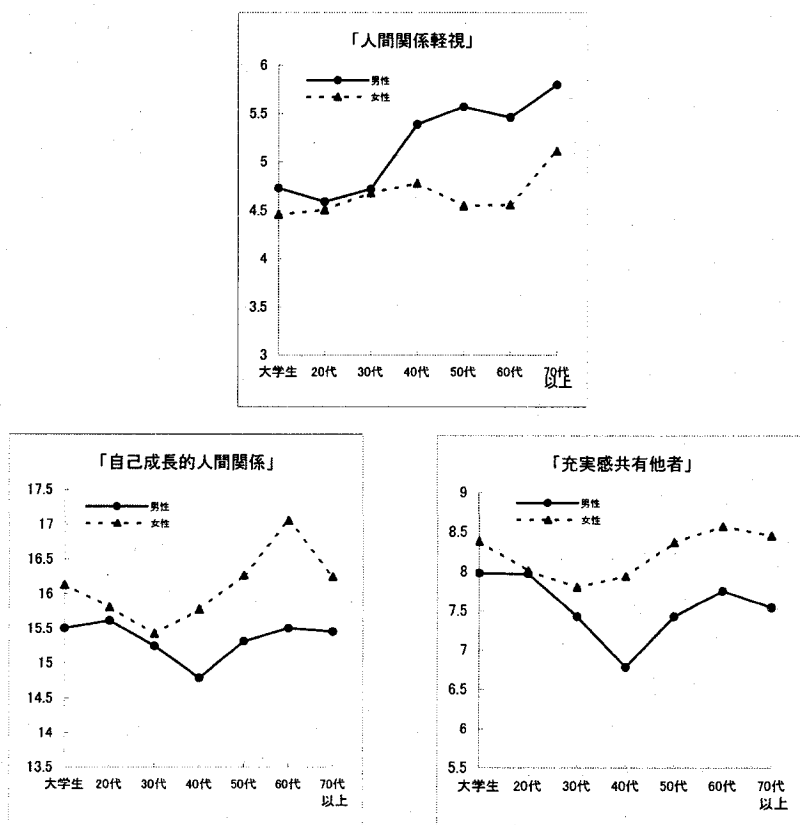


Figure 1 年齢段階別における「人間関係観尺度」の尺度得点推移

第1下位尺度の年齢に関しては、男性が0.1%水準で有意であったが、女性に関しては有意ではなかった。男性の年齢群に関して多重比較（Tukey法）を行ったが（表における有意差は隣接する年齢群間のみに絞って示した）、男性の30代から40代にかけて5%水準で得点が増加していた（40代は、大学生・20代の年齢群との間に有意差あり）。40代、50代、60代において性差がみられ、いずれも男性の方が女性よりも有意に得点が高かった。

第2下位尺度の年齢に関しては、男性は有意ではなかったが、女性は0.1%水準で有意であったため多重比較（Tukey法）を行った（有意差は隣接する年齢群間のみに絞って示した）。女性の50代から60代にかけて1%水準で得点が増加していた（50代・60代は、30代との間に有意差あり）。また、40代、50代、60代において性差がみられ、いずれも女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。

人間関係を自己成長につながるものとして捉える人間関係観や積極的に人間関係を築こうとする姿勢は、男性は、大学生から40代まで、女性は大学生から30代まで得点が増加傾向を示し（大学生と30代との間に有意差あり）、男女の得点差も余りみられないのであるが、その後、男女共に60代まで得点は増加に転じていく。40代、50代、60代において性差がみられ、第1下位尺度とは逆に、女性は40代以降、これらの姿勢を男性よりも強め、60代において自己成長的人間関係観が最も強まることが示されていた（60代は、大学生から50代の5つの年齢群との間に有意差あり）。

第3下位尺度の年齢に関しては、男女共に0.1%水準で有意であったため、男女それぞれの年齢群に関して多重比較（Tukey法）を行った（有意差は隣接する年齢群間のみに絞って示した）。男性の30代から40代にかけて有意に得点が増加し、40代から50代にかけて有意に得点が増加していた。女性に関しては、40代から50代にかけて有意な得点増加がみられた。性差については、40代、50代、60代、70代以上の4群において、女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。男性は40代が最も得点が低く、V字型の得点推移を示している（40代と男性の他の6つの年齢群すべての間に有意差あり）。女性はV字型ではないが、第3下位尺度においても30代の得点が最も低く、その後増加傾向を示している（30代と大学生・50代・60代・70代以上との間に有意差あり）。

3. 「人間関係観」と生き方態度に関する検討

まず、人間関係観尺度との関連を検討するために用いる指標について述べておく。検討に用いる生き方態度領域の尺度は、「意欲的生き方態度」、「目標・自己課題性・意味志向性」、「他者貢献性」、「精神的安定・ゆとり感」（高井,2004）、「失敗懸念」（高井,2007）である。前者3尺度は、EAL（Existential Attitude toward Life Inventory：高井,1999d）の項目から抽出し、本研究の指標としての位置づけで、一部追加修正して個別に独立させた尺度として用いたものである。本稿においては、「意欲的生き方態度」尺度の結果のみを述べることにする。

(1) 「意欲的生き方態度」尺度の項目内容および調査の手続き

EAL (高井, 1999d) から日々の生活に対して前向きで意欲的な生き方態度を示す項目を取り出し、逆転項目その他を新たに加えて6項目から成る「意欲的生き方態度尺度」を作成した (Table3)。意欲的生き方態度尺度 6 項目に対して、固有値 1 以上を基準にスクリーテストを行った結果、本尺度においては 6 項目の総合点 (1 因子解) で検討するのが妥当であるとした (寄与率は 58.4%)。「意欲的生き方態度尺度」の信頼性を Cronbach の α 係数によって求めたところ .85 であった。高い数値が得られており、尺度の内的一貫性は十分保たれていると言えよう。

調査対象者および調査時期、調査実施の手続き等は、人間関係観尺度と同様である。

Table3 「意欲的生き方態度尺度」の項目内容

1. いつも、ものごとに意欲的に取り組んでいる	.834
2. 周囲に流され、成りゆきまかせに生きている (逆転)	-.684
3. 自分の人生を充実したものにする努力をしている	.837
4. 自分の能力や可能性を生かした生き方をしている	.791
5. 何に対しても興味や関心がもてない (逆転)	-.659
6. 自分のなすべき事にいつも最善を尽くしている	.760

(2) 「意欲的生き方態度」尺度の年齢段階別および性差の検討

「意欲的生き方態度尺度」に関して、大学生から 70 代以上の 7 つの年齢群による年齢段階別の差および性差を検討した (Table4)。「意欲的生き方態度尺度」の尺度得点について年齢と性を 2 要因とする分散分析を行った結果、交互作用は有意でなく、年齢による主効果のみが有意であった ($F_{(6,1727)}=29.79, p<.001$)。男女込みで、多重比較 (Tukey 法) を行った結果 (有意差は隣接する年齢群間だけに絞って示した)、40 代から 50 代、および 50 代から 60 代にかけて有意な得点上昇がみられた ($p<.01, p<.001$)。性差には有意差はみられなかった。男女共に、40 代から 50 代、60 代にかけて意欲的な生き方態度を有意に強めていくことが示されていた。

Table4 「意欲的生き方態度尺度」得点平均値 (SD)

		大学生	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70代以上
男 性	M	20.58	20.70	21.62	21.23	< 22.63	<< 24.10	24.04
	SD	4.48	4.49	4.54	4.43	4.17	3.19	2.82
女 性	M	21.10	20.69	20.96	21.76	< 22.69	<<< 24.42	24.00
	SD	4.88	4.71	4.03	4.06	3.53	3.71	3.85
男女込	M	20.81	20.69	21.18	21.59	<< 22.67	<<< 24.28	24.02
	SD	4.66	4.63	4.21	4.18	3.72	3.48	3.29

((<<< $p<.001$, << $p<.01$, < $p<.05$)

(3)「人間関係観尺度」の高群・低群による生き方態度の検討

人間関係観と生き方態度との関連を検討するために、「人間関係観尺度」得点の高群および低群による2群比較を行った。人間関係を自己成長につながるものとして捉える第2下位尺度と、充実感を共有することのできる他者が家族以外に居るとする第3下位尺度を用いることにした。第2下位尺度と第3下位尺度の合計点における中央値を求め、中央値を除いて得点の高い方を高群、低い方を低群とした。

大学生、成人前期(20代・30代)、中年期(40代・50代)、老年期(60代以上)の4期別および男女別における生き方態度領域の4尺度得点の平均値比較をTable5に示した。「精神的安定・ゆとり感」の成人前期男性および「失敗懸念」の大学生女子を除いて、どの年齢群の男女においても5尺度すべてに2群の有意差がみられた。高群(人間関係をとおして自己を見つめ、人間関係を自己成長につながるものと認識し、家族以外に楽しい時間を共有できる他者をもっている人)は、低群に比べて、男女を問わず、意欲的な生き方態度を示し、目標をもって日々の生活において積極的に課題に取り組み、苦悩のなかにも意味を見出していこうとする意味志向性を持った生き方態度を示している。さらに、精神的な安定感やゆとり感もあり、他者への貢献志向ももっている様子が窺えた。逆に、人間関係に消極的な人は、失敗を恐れる気持ちが強いことも示された。

Table5「人間関係観尺度」の高群・低群による生き方態度尺度平均値比較

	大 学 生						成 人 前 期					
	男 子			女 子			男 性			女 性		
	高群	低群	t 値	高群	低群	t 値	高群	低群	t 値	高群	低群	t 値
N	58	62		53	41		64	85		134	152	
意欲的生き方態度	22.5 >>> 19	4.93***		23.0 >>> 18.8	4.46***		23.7 >>> 19	6.19***		23.2 >>> 18.6	10.23***	
目標・自己課題性・意味志向性	30.8 >>> 27	3.96***		32.8 >>> 28.2	4.59***		32.9 >>> 27	5.44***		32.0 >>> 25.7	9.68***	
他者貢献性	7.7 > 6.8	2.49*		8.5 >>> 6.9	4.20***		8.3 >>> 6.9	4.35***		8.0 >>> 7.0	5.19***	
精神的安定・ゆとり感	13.8 >> 12	3.37**		12.7 >> 10.5	3.27**		12.8 12	n.s.		13.3 >>> 11.7	4.60***	
失敗懸念	8.2 << 9.8	-3.33**		8.9 9.9	n.s.		7.8 <<< 9.6	-3.85***		8.1 <<< 10.1	-6.43***	

	中 年 期						老 年 期					
	男 性			女 性			男 性			女 性		
	高群	低群	t 値	高群	低群	t 値	高群	低群	t 値	高群	低群	t 値
N	44	108		210	147		68	105		144	55	
意欲的生き方態度	24.9 >>> 20.7	5.88***		23.9 >>> 20.1	10.42***		26.3 >>> 22.6	8.72***		25.5 >>> 21.7	6.89***	
目標・自己課題性・意味志向性	34.2 >>> 28.0	5.72***		32.3 >>> 27.4	8.69***		33.9 >>> 29.2	6.47***		34.2 >>> 30.3	4.94***	
他者貢献性	8.8 >>> 7.5	5.53***		8.3 >>> 7.1	7.04***		8.7 >>> 7.6	4.94***		8.8 >>> 8.0	3.65***	
精神的安定・ゆとり感	15.3 >>> 12.7	5.18***		14.7 >>> 12.5	6.91***		16.3 >>> 13.9	6.18***		15.6 >> 14.4	2.93**	
失敗懸念	6.1 <<< 8.6	-5.83***		7.4 <<< 9.1	-6.59***		6.5 <<< 8.1	-4.63***		7.2 << 8.6	-3.28**	

(>>> *** p<.001, >> ** p<.01, > * p<.05)

4. 生き方意識の年齢段階別比較

梶田 (1990) は、「自己の存在意義・自己受容」「脱自己中心性」「自己の可能性・目的」「努力への意志・向上心」「ニヒリズム」といった5領域で構成される「生き方意識インベントリー」を作成している。計30項目の質問項目によって構成され、<はい><?><いいえ>の3件法で回答するものである。当インベントリーを用いて、大学生から老年期に至る人びとを対象に調査を行った。調査対象者は、高井 (1994) と同様である。各質問項目について「はい」と回答した割合 (%) の推移によって生き方意識の男女の相違を検討した。

Table6・Table7は、年齢段階別および男女別の、それぞれの「はい」回答パーセンテージの上位5項目を示した(男女の特徴が示されている項目を網掛けで表示した)。高いパーセンテージを示している項目を見てみると、全体的傾向として男女ともに「21. 周囲の人の支えでこの生活が」「6.今までいろいろあったにせよ、機会・条件に恵まれ幸せ」「14. 成功よりその時々頑張りを」といった感謝や自己受容、および世俗的成功よりも内面的充実を重視するといった感覚・意識が非常に強く示されている。加齢に伴いこれらの意識は強くなる傾向にある。

Table6 「ハイ」回答率の上位5項目 (男性)

大学生・20代		30代		40代		50代		60代以上	
項目No.	%	項目No.	%	項目No.	%	項目No.	%	項目No.	%
6	81.4	6	86.3	14	85.1	21	85.9	14	92.7
上 21	80.4	19	83.6	6	84.2	14	84.5	21	90.2
19	77.5	21	80.1	21	80.7	19	84.5	6	87.8
位 24	70.6	24	76.0	19	78.1	6	83.1	11	87.8
9	69.6	14	71.9	1	76.3	1	78.9	19	87.8

Table7 「ハイ」回答率の上位5項目 (女性)

大学生・20代		30代		40代		50代		60代以上	
項目No.	%	項目No.	%	項目No.	%	項目No.	%	項目No.	%
19	85.6	21	88.3	14	92.3	21	96.7	21	98.2
上 21	84.4	6	87.7	6	89.6	14	94.4	6	94.7
24	82.0	24	87.7	21	88.5	6	90.0	11	91.2
位 6	79.3	19	78.4	24	86.3	24	87.8	14	91.2
9	73.1	14	76.6	1	74.2	1	81.1	1	86.0

全年齢群をとおしての男女の違いにおける特徴的な点としては、社会で働く男性の方が「19.自分の業績と言えるものを」といった、頑張りや業績へのこだわりがある一方で、女性の方は「24. 無理をせずマイペースで」「1.基本的には今のままの自分でいい」といった姿勢が男性よりも強い傾向が窺えた。

4. 考察

冒頭で述べた中年期以降にみられる生き方態度における男女の相違の背景要因を探るべく、本研究においては人間関係観の視点を取り上げて検討してきた。

家族や仕事以外の人間関係は重要とは思わず、さらに人間関係から得るものはないと考え、人との心のつながりも求めていないといった人間関係観（第1下位尺度）は、30代までは男女がほぼ同じような得点を示していたが、男性は30代から40代にかけてこれらの人間関係観を強め、50代以降も有意差はないものの得点は上昇傾向にあった。一方、女性は、若い世代から60代に至るまで大きな得点変動はみられず、40代、50代、60代で性差がみられ、すべて男性の方が女性よりも有意に得点が高かった。

男性の場合、40代、50代の中年期は、職場において重要なポジションに就く年代である。否応なしに仕事にコミットする度合いも強まり、多忙な日々を過ごしている年代であることも影響しているのではないと思われる。しかし、第1線から退き、時間的余裕のある老年期の得点も若い世代よりも高かった。老年期男性の場合は、人生を振り返って悔やむことや反省点に関する自由記述にもみられたが、コーホートのにも、戦後の日本経済の復興に向けて、“家庭を顧みず、仕事一筋で生きてきた”男性が多い（高井, 1999a, 2001b, 2002b）。無論、老年期男性の中にも、趣味を楽しみ、社会的活動などにも積極的に参加してきた人もいであろうが、会社人間として、家族以外の人間関係を築く機会や時間を余り持たないままに老年期に達した人も少なくないと思われる。渡邊（1998）は、男性は、仕事上の行き詰まりや定年退職など、仕事や組織を離れたひとりの人間として生きる視点をとれないことが多いという。70代以上の場合、有意差はないものの女性もまた60代から70代以上にかけて得点が増している。70代以上の女性も伝統的性役割観に縛られ、自由に対人関係を楽しめる時代に育ってこなかった人が多いコーホートである。さらに、男女共に70代以上の世代は、体力の衰えや病気のために外出自体が困難になったり、対外的な人間関係に消極的にならざるを得ない場合も多く、家族関係の重要度が増すと考えられる。

人間関係を自己成長につながるものとして捉え、積極的に人間関係を築こうとする自己成長的人間関係観（第2下位尺度）は、男性は、大学生から40代まで、女性は大学生から30代まで得点が増減傾向を示し、男女の得点差も余りみられないのであるが、その後、男女共に60代まで得点は上昇に転じていた。40代、50代、60代において性差がみられ、第1下位尺度とは逆に、女性は40代以降、これらの姿勢を男性よりも強め、60代において自己成長的人間関係観が最も強まること示されていた。60代までは男女共にV字型の得点推移を示し、男性は50代から、女性は40代から得点が増えに転じていた。女性が男性よりも、調査対象者の平均

年齢で約 10 年早く自己成長的人間関係観の得点を再び増加させていくことも特徴的であった。

自己成長につながるものとして人間関係を捉えるには、自分の身に起こる人間関係に伴う一連の出来事や、自己の内的世界で起こっていることを、距離を置いて冷静に見つめる姿勢が必要である。40 代から 60 代にかけて男性と女性の人間関係の捉え方に顕著な差がみられたことが特徴的であったが、女性は、傷つくこともあろう人間関係を通して自己を振り返り、自分と異なる考え方や個性をもつ他者との出会いを楽しみ、積極的に人との関わりをもとうとしている様子が窺えた。

第 3 下位尺度は、自分が充実感を感じ、楽しいと思える時間や場を共有する相手を家族以外にもっているか否かを問う項目で構成され、対人関係の行動的側面を問うものである。40 代以降、家族や仕事以外の人間関係を余り重視しない男性に比べて、女性は具体的に家族以外に対人ネットワークを広げ、このような人間関係の場と時間をもつことによって、人生をより充実したものにしていく。

次に、生き方態度との関連を含めて考察することにする。生き方意識インベントリー（梶田, 1990）を用いた検討からは、どの年齢段階においても男女共に努力を重視する意識は強く、加齢に伴い、他者への感謝の気持ちをもち、自分の過去の人生および自己を受容しつつ、世俗的成功よりも内面的充実を重視しようとする感覚や意識を強めていくことが示された。努力を重視する意識は、モリスの生き方尺度（努力型、多彩型、享楽型など、13 の生き方を測定）を用いた研究においても、20 代の若い世代から、60 代以上の老年期の世代まで、どの年齢層にも最も支持されている（大山, 1998）。努力を重視する姿勢は、ライフステージにおける男女それぞれの立場において、自分が負うべき役割を遂行したり、生き方やアイデンティティの問い直しの内的作業にも真剣に取り組むことに寄与するものであろう。

男女の相違をみると、男性の場合、若い世代から老年期に至るまで、「自分の業績といえるものを」といった姿勢が上位に挙がっていることが特徴的であった。男性は、女性よりも「上昇志向や過度な頑張り・競争心」が強い傾向にあること（30 代、50 代、60 代、70 代以上で性差）も示されている（高井, 2004）。「出世競争への参加を自己実現だと信じ」「人並みに出世したい」と、家庭を犠牲にして残業し、長時間労働に励む男性の姿が報告されている（鹿嶋, 1993）。男性は定年を迎えるまで社会の第一線で働かねばならず、「過度な頑張り・競争心」や「自分の業績」を志向する男性は、家族や仕事以外の人間関係を余り重視しない姿勢があることが示された。分離と愛着の概念で論じている Gilligan（1982）は、男性は愛着ではなく、個人の業績を重視し、力と分離によって仕事を通じて達成されるアイデンティティを確保するとしている。そして、この力と分離が男性を他者から隔たらせるとし、男性には、他者の存在が目に入らないといったところがあるのだと述べている。

人間関係を軽視する傾向が、男性の中年期以降に強まる背景には、家族や仕事以外の人間関係をもつ機会や、他者と楽しむ時間的余裕がない場合も多いと考えられ、仕事が生活における重要な部分を占めていることの影響も大きいのではないかとと思われる。鹿嶋（1993）は、働き過ぎや残業が一向に減らないのは、男性の意識の中にも、家族を扶養するために企業の論理に従わざるを得ず、出世やつきあいのために会社からなかなか帰れず、家庭を犠牲にしてもやむを得ないという「仕方がない症候群」が巣くっているからだとしている。そして、妻も「仕方がない症候群」に感染しているのだという。しかし、渡邊（1998）は、女性の方が先に「仕方がない症候群」からの脱皮を目指し、子育て役割終了後の人生を、「夫の世話にあけくれる自分、すなわち家族を基盤とする他者関連的自己確立だけではあきたりなくなり、独立的自己確立を目指すようになってきた」としている。男性は、仕事をとおしての独立的自己確立だけでなく、他者関連的自己確立も職場の人間関係のなかで実現できると信じ続け、現状で「仕方がない」と自分にも家族にもいいわけ・自己正当化しているのだと述べている。

他方、女性は、生き方態度において、若い世代から50代まで、「無理せずマイペース」といった姿勢が上位に挙がっていることが特徴的であった。また、競争心や過度の頑張りの姿勢を加齢に伴って弱め、「精神的安定・ゆとり感」を中高年期において増していくことが示されている（高井, 2004）。40代以降、人間関係を自己成長につながるものとして捉える自己成長的人間観の得点は、女性の方が男性よりも有意に高く、40代以降の年齢群のすべてに性差がみられた。達成の性差の説明において、価値づけの対象の違いが重要だとも言われるが（Eccles, Adler, and Meece, 1984）、男性は達成中心であるが、女性は対人関係や援助行動に対して関心が高いことが示唆されている（Eccles and Harold, 1992）。Gilligan（1982）は、女性は、愛情と仕事両面における自己と他者の相互依存において人間関係を語り、発達のにも個人的達成から配慮ある人間関係へと視点が変化し、現在の愛着関係を成熟に至る道として捉えているとしている。中年期以降に女性の他者受容の姿勢が強まることや（高井, 1999e）、本研究において示された中年期以降の女性の自己成長的人間関係観が男性よりも強いという結果は、Gilliganの研究結果を支持するものであろう。

また、女性は、中年期以降、男性に比して、充実感や楽しさを共有する相手を家族以外にもっているとする人が多く、人間関係を積極的に築こうとし、他者との関係をとおして自己を内省し、自己成長につなげていこうとする姿勢を強くもっていることが示された。アイデンティティ研究においても、青年期において他者との関係を断ち切った状態ではアイデンティティ形成はなされないとも言われる（Archer, 1993）。自己確立において、対他者的側面は重要なものであるが、これは青年期に限らない。アイデンティティの再構築（岡本, 1994; 村瀬, 1995）がなされると言われる中年期においても、人間関係は自己成長にとって重要な要因である。人は生涯

にわたってさまざまな人間関係をとおして自己や生き方の問い直し作業を行っていくものである。

Gilligan (1982) が、他者をケアし責任をもつといった他者との関係性の重要性を示したが、中高年期の女性において、他者に役立ち、必要とされる意識といった自己の存在価値意識の強まりも見出されており (高井, 1994, 1999b, d)、女性が中年期以降にポジティブな生き方態度を強めていく背景として、これらの要因も相互に関連しながら生き方態度に影響を与えていると思われる。大学時代から約 20 年間の縦断研究において、40 代女性における面接調査を行い、彼女らが他者との関係のなかでアイデンティティを再構成していく様子を描き出した Josselson (1996) の研究結果について杉村 (1999) は、中年期女性たちが、他者との葛藤をもちながらもなお、その関係を自分にとって意味あるものとして維持し続け、それをアイデンティティの源にするようすを読み取ることができるとしている。また、親やパートナー、子どもとの関係性について、杉村 (1999) は、肯定・否定の相反する 2 側面を包含する関係性の両価性に耐えながら、彼らと全人格的に関係に関与していかなければならないとしている。この努力が、相手の視点への考慮や葛藤の解決、自己の視点を柔軟にすることを促すとしている。中高年期の女性は、苦しみや悩みの中にも意味を見出していこうとする意味志向性が男性よりも強いことが示されている (高井, 1994, 1999d)。本研究に示された自己成長につながる他者との関係性は、家族や重要な他者との関係性だけに限られるものではない。中年期の生き方態度の変容は、アイデンティティの再構成にも関連するものであるが、女性はどうのような他者との関係性からも、また、たとえその関係性において葛藤を経験したとしても、その苦しみの中にも意味を見出し、新たな自己確立、新たな生き方態度への変容という課題に柔軟に取り組んでいこうとしているのではないと思われる。

本研究において示されたように、人間関係観は 40 代以上の年齢段階において男女の相違が明確にあらわれていた。仕事における達成や業績を強く志向する男性と、他者との関係性において生きると言われる女性との相違が本研究の人間関係観にも示されていた。さらに、ポジティブな生き方態度の個人差には人間関係観や生活の充実感に寄与する具体的な対人ネットワークの有無も影響を及ぼしていることが見出された。人生を人間関係の継続というよりはむしろネットワークとみなす女性は (Gilligan, 1982)、相手が自分にとって重要な他者であるか否かを問わず、さまざまな人間関係をとおして自己を成長させている。時代の変化により、女性の行動範囲も広がり、意識も変化し、有職女性であれ、専業主婦であれ、女性は積極的な人間関係を築き、他者との関係性が自己成長に寄与している様子が窺えた。これらのことも、中年期以降の女性の積極的な生き方態度の背景要因の一つになっているのではないと思われる。また、人間関係をスムーズに運ぶためには対人スキルも必要となる。青少年において、対人スキル欠如の問題が報じられているが、青少

年に限らず、生涯にわたって人間関係をうまく構築するスキルの必要性や対人ネットワークづくりの重要性も示唆された。高齢社会を迎えている日本において、老年期においても心身の健康を維持し、充実感に満ちて、柔軟に生きることが可能となるためにも、家族や家族以外の他者との関係性をどう捉え、その関係性をどう生きるかというテーマについて人生の早期から考える必要があろうと思われる。

文献表

- Archer, S.L. 1993 Identity in relational contexts: A methodological proposal. In J. Kroger (Ed.), *Discussions on ego identity* (pp.75-99) Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum
- Eccles, J., Adler, T., & Meece, J.L. 1984 Sex differences in achievement: A test of alterance theories. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 26-43.
- Eccles, J., & Harold, R. 1992 Gender differences in educational and occupational patterns among the gifted. In N. Colangelo, S.G. Assouline, & D.M. Amronson (Eds.), *Talent development: Proceedings from the 1991 Henry B. and Jocelyn Wallace National Research Symposium on talent development* (pp.3-29) Unionville, NY: Trillium Press
- Frankl, V.E. 1952 *Aerztliche Seelsorge*. Franz Deuticke, Wien, 3, 霜山徳爾訳 1986 死と愛—フランクフル著作集 2 みすず書房
- Frankl, V.E. 1955 *Pathologie Des Zeitgeistes—Rundfunkvorträge Über Seelenheilkunde*. Franz Deuticke, Wien, 宮本忠雄訳 1977 時代精神の病理学—フランクフル著作集 3 みすず書房
- Frankl, V.E. 1969 *The Will to Meaning—Foundations and Alications of Logotherapy*. New American Library, 大沢博訳 1986 意味への意志 ブレーン出版.
- Gilligan, C. 1977 "In a different voice: Women's conceptions of the self and morality", *Harvard Educational Review*, 47, 481-517.
- Gilligan, C. 1982 *IN A DIFFERENT VOICE — Psychological Theory and Women's Development* 岩男寿美子・生田久美子・並木美智子訳 1986 もうひとつの声・男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店.
- Gould, R.L. 1978 *Transformations*. Simon and Schuster.
- Josselson, R.L. 1996 *Revising Herself: The Story of Women's Identity from College to Midlife*. New York: Oxford University Press
- 梶田 叡一 1990 *生き方の心理学* 有斐閣選書
- 鹿嶋 敬 1993 *男の座標軸：企業から家庭・社会へ* 岩波新書
- Levinson, D.J., Darrow, C.N., Klein, E.B., Levinson, M.L. & McKee, B. 1978 *The Seasons of a Man's Life*. Knopf 南博 (訳) 1980 人生の四季 講談社
- Lowenthal, M.F. & Chiriboga, D. 1972 *Transition to the empty nest: Crisis, challenge, or*

relief? *Archives of General Psychiatry*, 26,8-14.

村瀬孝雄 1995 自己の臨床心理学 2 アイデンティティ論考 — 青年期における自己確立を中心に — 誠信書房

岡本祐子 1994 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究 風間書房

岡本祐子 2002 ライフサイクルとアイデンティティ 岡本祐子(編著) アイデンティティの生涯発達論の射程 pp.3-57.

大山七穂 1998 戦後日本の価値観変化 — モリスの生き方尺度の調査にみる — 東海大学紀要文学部 69,13-26

Rosenberg, S.D. & Farrell, M.P. 1976 Identity and crisis in middle aged men. *International Journal of Aging and Human Development*, 7,153-170.

Shainess, N. 1977 Treatment of crisis in the lives of women: Object loss and identity threat. *American Journal of Psychotherapy*, 31,227-237.

杉村和美 1999 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達 岡本祐子(編著) 女性の生涯発達とアイデンティティ — 個としての発達・かわりの中での成熟 — 北大路書房 pp.55-86.

高井範子 1994 実存分析的視点による現代人の生き方意識の検討 — 実存的生生活意識インベントリーの作成と成人に対する調査の実施 — 人間性心理学研究, 12(1),62-73.

高井範子 1998a 「自分に対する自信」に関する研究 — 中年期の自由記述分析を通して — 日本発達心理学会第9回大会発表論文集, 228.

高井範子 1998b 「自分に対する自信」に関する研究 — 青年期・成人前期の自由記述分析を通して — 日本心理学会第62回大会発表論文集, 39.

高井範子 1998c 「自己の存在価値意識」に関する研究 — 中年期の自由記述分析を通して — 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 144.

高井範子 1999a 「自分に対する自信」に関する研究 — 老年期を中心にして — 日本発達心理学会第10回大会発表論文集, 182.

高井範子 1999b 「自己の存在価値意識」に関する研究 — 老年期の自由記述分析を通して — 日本心理学会第63回大会発表論文集, 953.

高井範子 1999c 「自己の存在価値意識」に関する研究 — 青年期・成人前期の自由記述分析を通して — 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 685.

高井範子 1999d 実存分析的視点による生き方態度の発達の研究 — 実存的生き方態度インベントリー(EAL)による検討 — 大阪大学教育学年報, 第4号, 101-114.

高井範子 1999e 対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究 教育心理学研究, 第47巻, 第3号, 317-327.

- 高井範子 2000a 「ありのままの自己受容」に関する検討 — 青年期・成人前期 — 日本教育心理学会第 42 回総会発表論文集, 454.
- 高井範子 2000b 自己受容と生き方態度に関する検討 自己心理学研究, 大阪大学大学院人間科学研究科教育人格心理学講座, 第 1 巻, 57-71.
- 高井範子 2000e 実存分析的視点による生き方態度の発達的研究 II — PIL と自己受容による検討 — 大阪大学教育学年報, 第 5 号, 59-70.
- 高井範子 2001a 「ありのままの自己受容」に関する検討 — 老年期を中心に — 日本教育心理学会第 43 回総会発表論文集, 236.
- 高井範子 2001b 「人生を振り返っての反省点」に関する研究 — 成人期における人生受容との関連から — 日本心理学会第 65 回大会発表論文集, 688.
- 高井範子 2001c 他者からの受容感と生き方態度に関する研究 — 存在受容感尺度による検討 — 大阪大学教育学年報, 第 6 号, 245-254.
- 高井範子 2002a 人生に対する後悔および充実感の視点による生き方態度に関する研究 大阪大学教育学年報, 第 7 号, 131-141.
- 高井範子 2002b 「人生に対する後悔」と行動との関連 — 行動の有無を基準にした再検討 — 日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 1053.
- 高井範子 2004 生き方態度に関する研究 — 青年期および成人期 — 日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集, 36.
- 高井範子 2007 青年期および成人期における忍耐力と失敗懸念に関する研究 太成学院大学紀要, 第 9 巻 (通号 26 号), 31-40.
- Vaillant, G.E. 1977 *Adaptation to Life*. Little, Brown.
- 渡邊恵子 1998 女性・男性の発達 柏木恵子 (編) 結婚・家族の心理学 — 家族の発達・個人の発達 — ミネルヴァ書房 pp.233-292.

The Relation between the Developmental Change in the Sense of Interpersonal Relationships and Attitudes Toward Life

— Among People from Adolescence to Senescence —

Noriko TAKAI

This study examined the relation between the developmental change in the sense of interpersonal relationships and attitudes toward life among people from adolescence to senescence. Respondents were 1741 males and females (from 18 to 92 years old). A scale measuring the sense of interpersonal relationships consists of three factors (“desvaluing interpersonal relationships”, “the sense of interpersonal relationships in the light of self-growth”, “having others to share the sense of fulfillment”).

“Desvaluing interpersonal relationships” means that the participant does not value interpersonal relationships except for family and work. “The sense of interpersonal relationships in the light of self-growth” means that the participant see interpersonal relationships as a way to self-growth. For “desvaluing interpersonal relationships”, the scores were significantly higher for males than for females in the 40-49, 50-59, and 60-69 age groups. In contrast, “the sense of interpersonal relationships in the light of self-growth” showed that scores were significantly higher for females than for males in the 40-49, 50-59, and 60-69 age groups. In addition to these, “having others to share the sense of fulfillment other than family” showed that scores were significantly higher for females than for males in the 40-49, 50-59, 60-69, and >70 age groups. Furthermore, “the sense of interpersonal relationships in the light of self-growth” had a close relation to an active attitude toward life.